

市史しぼれ話

113

須賀地区

一八八九年（明治二十二年）四月に横須賀、高、蕪里（かぶざと）、高野（こうや）の四か村が合併し須賀村が成立しました。村名は、九三〇年代に当地域が匝瑳郡一八郷の「須賀郷」であったことに由来します。

須賀という地名は、全国各地に存在します。その語源は須が砂州さす・砂地を意味し、土地や集落に付けられています。九十九里平野は海岸線と平行して砂が堆積（たいせき）した砂丘列が発達し、山林や畑が多く集落も古くから形成されまし

た。そして列状の間の低湿地に沼地があり、そこを開拓して稲作が行われてきました。

須賀地区には、ほぼ東西に集落が広がる横須賀、列状の高まりの集落を意味する高、同様に蕪（かぶ）のような集落である蕪里など、集落名は地形から生まれたのでしょ。高野の語源は、荒地を新たに興すの意で、開墾地に付けられることの多い地名です。

この地域では沼沢地をめぐる新田開発や用排水問題など村とむら、集落ごとの対立が絶えませんでした。

横須賀は、長徳寺周辺や平安



集落名が刻まれた石塔

時代から鎌倉時代初期にかけて紀州（今の和歌山県）熊野神社の領地であったなごりとみられる木の宮あたりから開けたのでしょ。新田や西場（にしば）なども地域の歴史を伝える地名です。昭和三十年代以降の耕地整理により数個の沼が一面の水田となり、大きく景観を変えました。

高は林崎（はやしさき）、八市（やいち）、在久内（ざいきゅうち）、蒲田（かばた）、高野（こうや）、道ノ口（みちのくち）などの集落で一村を形成しますが、いずれも江戸時代初期には成立していたようです。石碑などに集落名が刻まれており、信仰活動などは集落ごとに行われていたようです。

蕪里は江戸時代、支配者が一人でしたが、「上蕪里村」「下蕪里村」と集落を分けていたようです。同村の豪農・大木幸太夫は、一七九一年（寛政三年）頃に俳人・小林一茶との交流があり文人としての活動は広く知られていました。

高野には笹曾根（ささねね）、中高野、戸田の三集落からなりそれぞれに鎮守とお寺があり、「笹曾根村」「戸田村」などの記載も見られました。

須賀地区は集落ごとのまとまりの強さが感じられます。

（生涯学習課）